

## 医療系学生の文化と価値構造に関する研究

眞嶋朋子<sup>\*1</sup> 中西睦子<sup>\*1</sup> 稲岡文昭<sup>\*1</sup> 藤崎和彦<sup>\*2</sup>  
中村千賀子<sup>\*3</sup> 高梨俊毅<sup>\*4</sup> 原田千鶴<sup>\*5</sup>

### A Study on the Culture and the Value-Belief System among Medical, Dental, Dental Hygiene and Nursing Students.

Tomoko Majima : The Japanese Red Cross College of Nursing

Mutsuko Nakanishi : The Japanese Red Cross College of Nursing

Fumiaki Inaoka : The Japanese Red Cross College of Nursing

Kazuhiko Fujisaki : Nara Medical University

Chikako Nakamura : Tokyo Medical and Dental University

Toshiki Takanashi : Chiba College of Health Sciense

Chizuru Harada : Japanese Red Cross Musashion Junior College of Nursing

The purpose of this study was to measure individual Value-Belief System among medical, dental, dental hygiene and nursing students. Based upon a review of literature, 48 items were developed for a tentative Value-Belief System Scale (VBSS).

Each item in the scale derived from of the following three categories ; 1) Holiness, 2) Play, and 3) Profane. The first two (categories) stood for characteristic of youth culture and last one (category) that of adult culture. The main categories were divided into four subcategories ie. the relationship to 1) Self, 2) Others, 3) Nature, and 4) Ideal. The Likert type four point scale was used for scoring grade individual's responses. The VBSS was tested on 227 subjects, including medical, dental, dental hygiene and nursing students.

When data was analyzed, it indicated that all students tended to "Holiness" (Medical students tended to "Play" and dental students tended to "Profane" in comparison with the other students).

---

\*1 日本赤十字看護大学 \*2 奈良医科大学衛生学教室 \*3 東京医科歯科大学歯学部 \*4 千葉県立衛生短期大学 \*5 日本赤十字武藏野女子短期大学

Aftes checking face validity, construct validity and reliability were examined. Four items were deleted for invalid ; then 44 items were under the following statistical analysis. Cronbach's  $\alpha$  was more than. 60 in each category. A varimax rotated factor analysis yielded : 1) 4 factors in the category of Holiness, 2) 3 factors in the category of Play, and 3) 6 factors in the category of Profane.

Suggested future tasks are

- 1) When factors are renamed, three factors (Two factors in the Holiness and one factor in the Profane) that are difficult in an explanations need to be refined.
- 2) As number of items in each factor are differ from that of other factors, regulation of the number of items is needed.

**キー・ワード**

医療者教育 Education For Health Care Professionals, 価値構造 Value-Belief System, 青年文化 Youth Culture, 成人文化 Adult Culture

## I はじめに

近年、医療における人権の問題、生命倫理の問題等が日々問われている一方、セルフケアの考え方方が徐々に浸透していき、医療者役割も伝統的なそれから徐々に変容している現状がある。それゆえ医療者の教育は、このような複雑な状況に対応できる人材の育成を図ることを重要課題としている。そのことの実際的な意味は、これまでどちらかといえば専門的知識・技能の伝授に偏ってきた医療者教育を価値観形成の観点から見直すことであり、そのための課題の1つとして、現代社会に生じている価値観変動の影響を医療系学生がどのように受けているかという問題の解明がある。

本研究では、こうした問題を解明するための基礎資料として医療系学生の価値信条体系の特性を把握し、価値信条体系を測定する質問紙の構造を検討する。

## II 文 献 検 診

### 1. 青年期の価値観形成の変化

従来より青年期の価値観形成については、心理学や教育学の研究者により多くの研究がなされている<sup>1-8)</sup>。その中心課題は、青年期の内面的世界観や青年個人とこれをとりまく外的世界との関係におかれている。

青年期は内的世界において疎隔と全能性が交互し、疎隔によって孤立、非現実性、不条理、および対人的、現象学的世界からの断絶といったもろもろの感情が伴う時期である。青年層は実際に社会から離脱しており、自己と外的世界が一致していないという感情をもち<sup>9,10)</sup>、試行錯誤により価値観形成を行う。この時期の価値の選択は、E.H.エリクソンが主張するアイデンティティ形成の中心課題であり、ハーヴィガーストもこれを青年期の発達課題として取り上げている<sup>11)</sup>。また価値観形成の下位概念である道徳発達は、社会化<sup>11)</sup>の一面とみなされており、価値観形成は青年期の社会化過程において重要な位置を占めている。

近年の変化をみると、大学入学を将来ゴールとして重要視した社会、教育システムが生じることによって、今までの青年たちにはみられなかった様々な現象が現れてきている。それらは進路の未決定や就職不安などで留年を繰り返すモラトリアム現象、アパシー、人格の未熟化現象、抑鬱、性的逸脱、摂食障害などであり、こうした問題に関する報告が増加してきている<sup>12,13)</sup>。このような問題が生じている背景には、教育システムの中で青年たちの人生課題に関する試行錯誤の選択余地が狭く、発達課題が先送りとされ、みずからが悩む過程を通らずに社会化プロセスが進行していることにあり、内的葛藤はいわゆる問題行動としてしか他者に伝達されにくく<sup>12,13)</sup>。

このように青年期の内的世界における価値観形成の変化が生じている一方に、社会全体では、青年層と成人層の間の価値葛藤に変化が起こってきていく

る<sup>14)</sup>

従来のほぼ一貫した世代間の対立図式は、青年の理想主義対大人の現実主義であったが、それに加えて個人の自由、遊びの要素が戦後の青年文化の中に加わるようになった<sup>15,16)</sup>。

生活の価値観調査で4分の1を超える若者の共感を呼ぶようになった「金や名誉を考えず、自分の趣味とあった暮し方をする」ような生き方は、私的自由、広い意味での「遊び志向」という性格をもっている。この遊び志向が「まじめ志向」に変わって青年層の圧倒的な多数派を形成した<sup>8, 14-16)</sup>と言われている。

すなわち、青年たちは自己の将来課題を悩みながら発見するかわりに、社会的に他者から与えられた課題を急速に達成することを求められ、社会や自己に対して「まじめ」に対応するよりも比較的コントロールが可能な自分の周囲の課題に取り込む傾向が強くなったことが、近年の変化として注目される。

## 2. 医療における倫理的・価値的問題へのアプローチの動向と医療系学生の価値観形成の特徴

社会の変化の中で時代の申し子としての学生側の変化が注目される一方、医療内容の変化とそれに伴う医療者教育の現場で求められる教育内容の高度化、複雑化が進行しつつある。

従来、医療を提供する医師は「患者のために、患者の利益になるように行動すべきである」というような道徳命題のもとに父権主義的役割<sup>17)</sup>を担ってきた。

しかし、アメリカにおいては1960年代から1970年代にかけて民主化運動が起き起り、少数民族や黒人解放運動、女性解放運動、消費者運動、ベトナム反戦運動などアメリカ社会の様々な面に潜む矛盾や弱者差別、抑圧がその批判の対象として取り上げられてきた。その中で、当然医療も批判対象となり、民主化運動や消費者運動の課題として医療における構造的弱者である患者の権利擁護が取り上げられ<sup>18)</sup>、医療者役割のパラダイム転換<sup>19)</sup>が求められるようになってきた。そして、多元的な価値観が併存する実際の医療現場で起こる様々な医

療行為実施上の判断は、医師が抽象的な命題によって表された個人的信念や職業集団内の内的規制に基づいて意思決定を行うのではなく、状況に即した倫理性、民主性、社会的合意性を考慮に入れた判断によって決定されるべきであるという認識が高まってきている<sup>17, 18, 19)</sup>。このような中で、日本の医学教育においても医療に関する治療上の意思決定、すなわちバイオエシックスの課題は「医の倫理」と区別して、カリキュラムの中に取り入れようと試案されており<sup>20)</sup>、その教育方法として、単純な道徳律の応用のみでは問題解決が不十分な事例検討の積み重ねが試みられている<sup>18)</sup>。

医療における社会的ニードの変化に伴って、医療系学生の価値観形成や社会化過程への関心は高まっているが、実際的な研究報告はそれほど多くなく、わが国でもわずかしかない。以下、比較的研究が進められている医学生と看護学生の特性に関する研究結果をみると、

1) 医療系学生の中でも、医学生は入学時には社会経験が少なく、出身社会階層、家庭環境、教育環境にある種のバイアスをもつ均一集団であり、多くは外からの影響を受けながら比較的早期に漠然とした志向をもって入学決定を行う傾向にあり、医学知識や経験と無関係にみずから積極的に医師役割を引き受けやすく<sup>21, 22)</sup>、また学年が進むにつれて学生のヒューマニズムのスコアが減り、シニシズムのスコアが増加する<sup>23, 24)</sup>ことが示されている。

2) 看護学生の特性は一般学生に比べて自我の確立が有意に低いが、社会性の確立は高い<sup>25)</sup>。また学生、看護婦ともに職につくことを「自分が成長する」「新しい知識を得る」というような個人的志向のほうが、看護職全体の向上を志向するよりも強い<sup>26)</sup>という集団特性を示していることも報告されている。これらの研究によると、医学生、看護学生ともに職業志向の高さにおいて共通項があるほか、集団の同質性においても共通している<sup>21-26)</sup>。したがって、入学時にすでに同一価値をもつ集団が形成されやすいという特徴を有するといえる。

これまでみてきたように、時代背景が必然的にもたらす青年層の価値観の変容、医療現場における伝統的価値の崩壊と新しい価値形成の要請、すなわち従来のステレオタイプな父権主義的医療者役割からの脱皮の必要性が高まってき

医療系学生の文化と価値構造に関する研究  
ている。しかし、その中での医療者教育の成果は、一方でシニシズムを醸成し、  
他方に自我確立の弱い個人志向的集団を生み出すというように、今日の思想状  
況からみるとむしろ改革の逃避者をつくる傾向にある。これはおそらく、医療  
者教育の保守性が時代の要請を受けとめかねていることからくる一種のひずみ  
であろうと思われる<sup>27,28)</sup>。

本研究は、このような状況を医療者教育の現場で解決していくことを最終的  
なねらいとしている。

### III 研究方法

下記に基づく質問紙調査を行う。

1) 調査対象：対象者は調査協力が得られた都市部の医学部、歯学部、歯科  
衛生士専門学校、看護学士課程、3年課程の看護短期大学および看護専門学校、  
計6校、第1年次生計352名である。

2) 調査手続き

①調査時期：1990年7月1日～8月末。

②調査方法：下記に述べる自記式の質問紙を含む調査用紙（無記名）を施設  
ごとに一斉配布、回収する方式で行う。

3) 価値信条体系質問紙の構造

①価値信条体系質問紙の概念枠組み

すでに述べたように青年期文化の特徴である理想主義的傾向、および遊び  
志向、ならびに成人文化の特徴とされる現実主義を、それぞれ井上の論考<sup>15)</sup>  
の定義に基づいて聖性、遊性、俗性と定めた。その内容は以下のとおりであ  
る。

聖性とは何らかの超越的存在への非合理的献身を基礎にする現実生活から  
の離脱で、その思考と行動はまじめであると同時に反文化でもある。

遊性とは実生活の遊戲化であり、現実からの離脱という点では聖性と同一  
の方向性をとる。しかし、その思想と行動はゲーム的で、シリアルスな方向に

は向かわず、コミットメントは市民生活における個人の責任とは無関係である。

俗性とは、実生活に根をおろすもので、いわゆる功利原則、あるいは現実原則に従うものである。

これらの3つの概念を主要なカテゴリーとし、このそれぞれにおいて、個人が環境世界とどのように関係を切り結んでいるかをとらえるために自己、他者、自然、理念との関係性をそれぞれのカテゴリーのサブカテゴリーとして位置づけた。

## ②質問紙の作成

質問紙の項目は、筆者らが青年世代の発言を載せている文献<sup>5,15,16)</sup>、資料等に基づいて当初56項目作成し、その後質問内容が対象集団の体験として一般的であるかどうか、理解可能であるかどうかの観点から検討し、最終的に48項目に精選して構成した(資料1-1～1-2)。各カテゴリーおよびサブカテゴリーに含まれる項目数は表1のとおりである。各項目には0～3までの4段階のリカートスケールを設け、これを用いて回答を点数化できるようにした。

表1 初期のカテゴリー別項目数

サブ カテゴリー	青年文化		成人文化	合計
	聖	遊	俗	
自己との関係	4	4	4	12
他者との関係	3	4	5	12
自然との関係	4	4	4	12
理念との関係	3	4	5	12
合 計	14	16	18	48

## IV 結果および考察

初期の調査対象者352名のうち回答者は227名（回答率64.5%）であった（表2）。性別でみると男性23.8%（約1/4）、女性76.2%（約3/4）である。このうち、歯科衛生士専門学校と看護系の学生は全員女性であった（表3）。

専攻課程別平均年齢、年齢分布をみると、全体の平均年齢は18.9歳であり、最も年齢の若い18歳のものが全体の48%を占めている。専攻課程別にみると歯学部の平均年齢は約20歳と高く、年齢幅も18～28歳と広い（表4）。

表2 専攻課程別初期対象者数および回答率

専攻課程別	初期対象者数	回答者数	回答率
医学部	96人	50人	52.1%
歯学部	82	30	36.6
歯科衛生士専門学校	30	30	100.0
看護学士課程	60	50	83.3
看護短期大学	42	25	59.5
看護専門学校	42	42	100.0
合 計	352	227	64.5

表3 対象者の性別

性 別 専攻課程別	男	女	合 計
医学部	36人(72.0%)	14人(28%)	50人
歯学部	18(60.0)	12(40)	30
歯科衛生士専門学校	0	30(100)	30
看護学士課程	0	50(100)	50
看護短期大学、専門学校	0	67(100)	67
合 計	54(23.8)	173(76.2)	227

表4 平均年齢分布

専攻課程別	年齢 平均 年 齡	年齢分布												合計
		18歳	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	不明	
医学部	19.42歳	13人	19	13	0	0	2	1	0	0	1	0	1	50人
歯学部	19.97	10	4	8	3	1	1	0	0	0	1	1	1	30
歯科衛生士専門学校	18.73	19	9	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	30
看護学士課程	18.48	32	15	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	50
看護短期大学、専門学校	18.55	34	29	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67
全 体	18.93	108	76	27	3	1	5	1	0	1	2	1	2	227

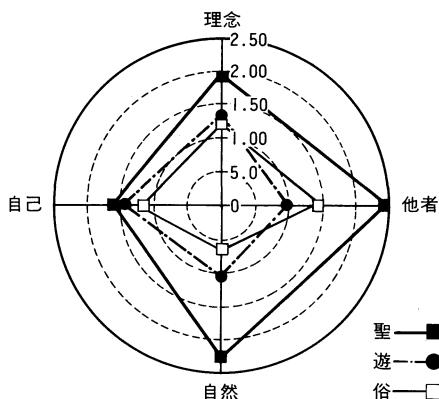


図1 全専攻課程のカテゴリー別平均値

得られたデータは、カテゴリーごとに平均値を求めた後、統計解析ソフトSPSS/pc+を用いて、一元配置分散分析を行い、各専攻課程間の平均値の比較を行った。さらに質問紙の構造を検討するために、(1)項目分析、(2)表面妥当性の検討、(3)構成概念妥当性の検討、(4)内部整合性の検討を行った。

## 1. 医療系学生の価値信条体系の比較

### (1) 対象者全体の価値信条体系の特徴

対象集団全体のカテゴリー別平均値を各カテゴリー別に縦軸の上下、横軸の左右に配置し、おのおのの軸上に平均値をプロットすると、聖性、遊性、俗性

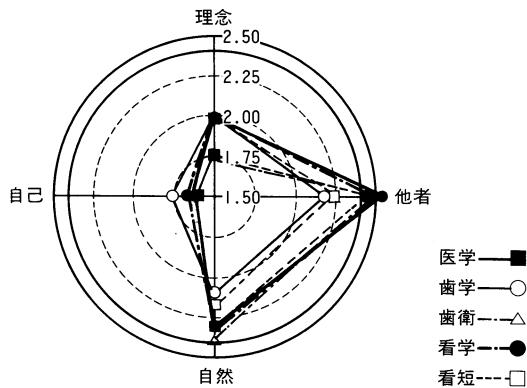


図2 聖性の専攻課程別平均値

注) 医学: 医学部, 歯学: 歯学部, 看学: 看護学士課程, 歯衛: 歯科衛生士専門学校, 看短: 看護短期大学・看護専門学校

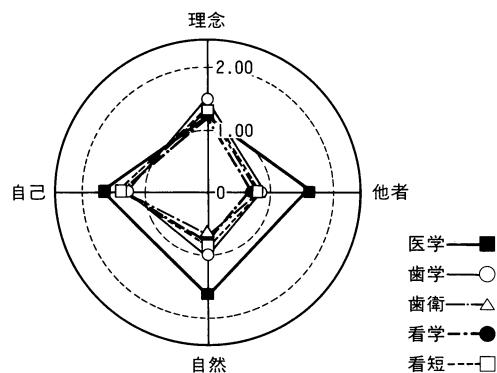


図3 遊性の専攻課程別平均値

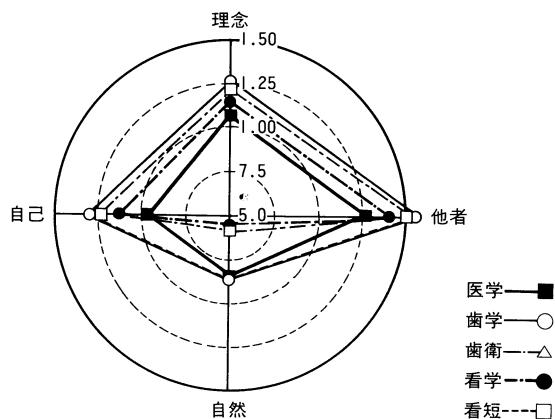


図4 俗性の専攻課程別平均値

の順に平均値の高いことがわかる(図1)。特に聖性では、他者と自然のそれが高く、遊性では自己が高く、俗性では他者の平均値が相対的に高い(詳細は表5参照)。

### (2) カテゴリー別にみた専攻課程の特徴

聖性は、他者の平均値が全体として高いが、とりわけ高いのが看護学士課程と歯科衛生士の課程である(図2)。つまり、これらの学生は、他者との関係性において理想主義的信条を抱く傾向が強いといえる。

遊性では医学部が総じて高く、特に他者、自然において他の課程を引き離している。つまり医学部学生は、他者や自然の関係において、現実的なかかわりからむしろ脱け出すことを重視している傾向が強い(図3)。

俗性では歯学部がおしなべて高い。また、自然を除く3つのサブカテゴリーで医学部を引き離しているのが目立つ(図4)。これでみると歯学部学生は概して現実派であるとみることができる。

### (3) 専攻課程間の平均値の比較

聖性全体では専攻課程間に有意差はなかった。遊性では、医学部が他の専攻課程より高く、俗性では、歯学部が看護短大・専門学校を除く他の専攻課程より高く、遊性、俗性とも有意差があった(表5)。

## 2. 質問紙の構造の検討

### (1) 項目分析

①平均値による検討：カテゴリーごとに全体の平均値±標準偏差の範囲(聖性全体=1.72~2.38、遊性全体=0.75~1.64、俗性全体=0.80~1.44)を逸脱しているものは聖性では14項目中7項目(項目2, 3, 4, 5, 6, 9, 11)、遊性では15項目中1項目(項目15)、俗性では18項目中6項目(項目37, 38, 39, 41, 43, 46)であった。

このように聖性、俗性のカテゴリーには得点のバラツキの大きい項目がより多く含まれている。

②相関マトリックスによる検討：カテゴリー別に項目間の相関係数を求める

## 医療系学生の文化と価値構造に関する研究

表5 カテゴリー別平均値の専攻課程間の比較 (\* : p &lt; 0.05)

n = 227

サブカテゴリー カテゴリー	聖性	遊性	俗性
全 体	平均値 医学:2.00 歯学:2.01 歯衛:2.05 看学:2.12 看短:2.05	平均値 医学:1.54 歯学:1.19 歯衛:1.07 看学:1.03 看短:1.12	平均値 医学:1.06 歯学:1.27 歯衛:1.05 看学:1.08 看短:1.17
自 己	医学:1.75 歯学:1.63 歯衛:1.61 看学:1.66 看短:1.60	医学:1.66 歯学:1.31 歯衛:1.33 看学:1.37 看短:1.40	医学 .97 歯学:1.30 歯衛:1.11 看学:1.13 看短:1.24
他 者	医学:2.21 歯学:2.26 歯衛:2.53 看学:2.57 看短:2.48	医学:1.66 歯学: .91 歯衛: .88 看学: .70 看短: .86	医学:1.28 歯学:1.58 歯衛:1.30 看学:1.42 看短:1.15
自 然	医学:2.10 歯学:2.17 歯衛:2.39 看学:2.32 看短:2.38	医学:1.63 歯学:1.06 歯衛: .73 看学: .84 看短: .90	医学: .86 歯学: .89 歯衛: .58 看学: .57 看短: .61
理 念	医学:1.98 歯学:2.04 歯衛:1.72 看学:1.99 看短:1.75	医学:1.19 歯学:1.50 歯衛:1.35 看学:1.22 看短:1.33	医学:1.06 歯学:1.26 歯衛:1.12 看学:1.14 看短:1.21

注) 医学:医学部、歯学:歯学部、看学:看護学士課程、歯衛:歯科衛生士専門学校、

看短:看護短期大学・看護専門学校

と聖性，遊性，俗性とともにカテゴリー全体と各項目の相関係数はすべて  $p < .001 \sim .01$  の間で有意であった。項目間の相関係数の最大値は遊性の項目19対項目27の  $r = 0.5681$  で，他はすべて  $r = 0.5$  以下であり，項目削除を要するほどの項目間の高い類似性は見出されなかった。

### (2) 表面妥当性の検討

研究者 7 人により各項目の記述内容がカテゴリーの概念を含んでいるかどうかを検討し，2つの項目（項目17, 45）を，二重の概念を含む不良項目として削除することとした。

### (3) 構成概念妥当性の検討

① 初期因子分析：ここではまずカテゴリー別に項目削除前の48項目について検索的にバリマックス回転による因子分析を行った。その結果，第1因子の寄与率は聖性，遊性，俗性の順に17.8%（固有値2.5），28.2%（固有値4.5），18.6%（固有値3.3）といずれもそれほど高くなかった。

以下，カテゴリー別にみると，

聖性では5因子が認められたが，第5因子については該当項目が1項目（項目10）のみであるため，この項目を除いた。

遊性では3因子が認められた。

俗性は7因子に分かれ，第7因子は該当項目が1項目（項目44）であるため，この項目を除いた。したがって，削除項目はこの2項目と表面妥当性の検討で不良項目とみなした2項目の計4項目（項目10, 17, 44, 45）となり，残りは44項目となった。これをカテゴリー別にみると聖性13，遊性15，俗性16項目となる。

② 2回目の因子分析による構成概念妥当性の検討：上記44項目を聖性，遊性，俗性のそれぞれについて再度バリマックス回転による因子分析で検討した。各カテゴリーの項目は表6～表8に示すように，聖性では4因子，遊性では3因子，俗性では6因子に収束し，それぞれのカテゴリーの第1因子の固有値は，2.5, 4.3, 3.1と小さく，累積寄与率は，聖性では第4因子で50.3%，遊性では第3因子で50.3%，俗性では第6因子で60.1%であった。このことは取り出さ

表6 2回目の聖性の因子分析（バリマックス回転による因子負荷量）

初期カテゴリー	項目番号	因子1	因子2	因子3	因子4
自己	1	.55456	-.30788	.00430	.16687
	2	.05001	.75095	-.11884	-.10364
	3	-.12982	.04444	.02461	.83586
	4	-.04651	.13962	.64109	.06029
他者	5	.62701	.01791	-.01861	-.06105
	6	.71836	-.02333	.11143	-.12675
	7	.42031	.18091	.26272	-.23542
自然	8	.47680	.03696	.10869	.50347
	9	.54047	.28887	.01445	.26203
	11	.11849	-.13131	.72645	-.06527
理念	12	.12146	.23170	.64390	.11393
	13	.04706	.60322	.23501	.32156
	14	-.04218	.70440	.26386	.03630
固有値		2.5	1.8	1.2	1.1
寄与率(%)		18.9	13.6	9.6	8.7
累積寄与率(%)		18.9	32.4	41.6	50.3

れた因子では説明できない要素が4～5割残されていることを示している。因子負荷量±.50以上で各因子に収束している項目の組合せは、聖性、遊性、俗性とともに初期の因子分析における結果と一致しており、このことは項目削除が因子構造にそれほど大きな影響を与えず、したがって因子構造が比較的安定していることを示している。以下カテゴリーごとに各因子の特性を検討する。

1) 聖性（表9）：第1因子は自分の意見をはっきり表明する人をうらやみ、人の世話を買って出る人を尊敬するというように社会正義や価値あるものへの感性を示しているが、全体の基調となるものは、能動性ではなくむしろ受動性である。したがってこの因子は「消極的愛他精神」と命名できる。第2因子は人の前ではっきり意見の主張をし、周囲の意見に振り回されずに、自己の信念

表7 2回目の遊性の因子分析（バリマックス回転による因子負荷量）

初期カテゴリー	項目番号	因子1	因子2	因子3
自己	15	-.10433	.20281	.71326
	16	.05356	-.01571	.76365
	18	.41539	-.10724	.62016
他者	19	.79037	.12004	-.02559
	20	.71140	.18483	-.03312
	21	.63148	.01544	.15807
	22	.67663	.17903	-.04569
自然	23	.67166	.04295	.00709
	24	.71127	-.03083	.08363
	25	.58117	.13186	.13426
	26	.76212	-.10178	.05479
理念	27	.25593	.61937	.00505
	28	.03811	.77954	.03199
	29	-.06640	.65910	.01888
	30	.08595	.54334	.04168
固有値		4.3	1.8	1.46
寄与率(%)		28.7	11.9	9.7
累積寄与率(%)		28.7	40.6	50.3

によって前進しようとする意志を示している。この因子は「主体的前進」と命名した。第3因子はチャレンジ精神をもち、自分の意のままにならない生き物の養育を認め、人生を意味づける思想を求めるなど求道的な性質を含んでいる。したがって、この因子は克己の精神を含むものとして「禁欲的充実」と命名できる。第4因子は目的達成のために目前の願望を抑えるという禁欲の要素と、古いものを大切にする心情を合わせて何か恒常的に価値あるものを目指そうとする志向性と解釈し、「恒久性志向」と命名した。

2) 遊性（表10）：第1因子は他者への関心が低く、仕事や労働も重要と思わず、むしろかっこよさや安逸にひかれる特性を示しており、したがってこれは「個人生活志向」と命名される。第2因子は社会、国家を視野におく理念が

## 医療系学生の文化と価値構造に関する研究

表8 2回目の俗性の因子分析(バリマックス回転による因子負荷量)

初期 カテゴリー	項目 番号	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
自己	31	-.09837	.09915	.82677	-.00027	.11774	.08847
	32	.21065	.27804	.43598	.10688	.26419	.08733
	33	.40070	-.12125	.57073	.07171	-.14270	-.39408
	34	.53501	.45463	.19306	.27841	.26919	-.07132
他者	35	.37105	.56504	.04694	-.05506	-.14914	.02445
	36	-.08008	.81861	-.03381	.08237	.19390	-.03202
	37	.08918	.58270	.40866	-.11961	-.00286	.11992
	38	.73640	.14969	-.08939	-.01801	.02060	.13330
自然	39	.23076	.06448	.02493	-.24964	.18217	-.60255
	40	-.01952	-.03189	.04066	.69341	.28648	.32142
	41	.29294	.00110	-.08656	.14535	.03199	.55645
	42	.04778	.03832	.01602	.82173	-.19759	-.02800
	43	.16888	.13787	.34315	-.18162	.00644	.65266
理念	46	.12730	.03537	.17994	-.28413	.64324	-.05084
	47	.05318	.06953	-.00221	.15456	.81542	-.03698
	48	.73395	-.00991	.16553	-.02591	.14109	.02708
固有値		3.1	1.7	1.3	1.3	1.1	1.1
寄与率(%)		19.3	10.7	8.2	7.9	7.1	6.9
累積寄与率(%)		19.3	29.9	38.1	46.1	53.2	60.1

ないことを共通項としており、それゆえこれは「無思想」と命名される。第3因子は関心の中心が自分の感覚的世界や自己アピールにあることから、「ナルシズム」と命名した。

3) 俗性(表11)：第1因子は、人間関係において自己と同質ではない他者とのかかわりを遮断する傾向を示している。これは「他者切捨て」と命名された。第2因子は人間関係において自己の利益を優先させる性質を表しており、これは「功利」と命名した。第3因子は自己探求の放棄であり、これは「イージーゴーイング」と命名される。すなわち困難に取り組んだり、悩んだりすること

表9 因子分析後の各因子の命名：聖性

因子	初期 カテゴリー	項目	命名
1	自己 他者 他者 他者 自然	1) 教室でもどこでもはっきり自分の意見のいえる人がうらやましい 5) 弱いもののいじめを見るとても腹がたつ 6) 会合などいつも世話役を買って出る人はえらいとおもう 7) 自分には、誰か他の人に話して聞かせたくなるような愛すべき友だちがいる 9) 洋服など自分が好きなものはだいじにしてだめになるまで使う	消極的愛他精神
2	自己 理念 理念	2) 自分はみんなと違う考えでいると思ったときには、たいてい自分の意見をいう 13) いま私はある理想に燃えていて心が充実している 14) 周囲の誰もが反対しても、自分が真理だと思う道を進むつもりだ	主体的前進
3	自己 自然 理念	4) 自分のできないこと、苦手なことになるべくチャレンジしている 11) 生きものを育てることはふつうの仕事とちがって気持ちを豊かにする 12) 自分の人生を意味づけてくれるような言葉や思想をいつも探している	禁欲的充実
4	自己 自然	3) 人は自分の目的のためにほしいもの、やりたいことをがまんすべきだ 8) 古い建物がどんどん壊されていくのは、見るにしのびない	恒久性志向

表10 因子分析後の各因子の命名：遊性

因子	初期 カテゴリー	項目	命名
1	他者 他者 他者 他者 自然 自然 自然 自然	19) 人のために役立つような働きをめざそうとは思わない 20) 日々の仕事や労働が人生でそれほど重要なことは思えない 21) 早起きしたり、時間を守ったりという日常生活の秩序をあまり重く見ていない 22) 懈んでいる人間は勝手に悩ませておけばいいと思う 23) 「人間と自然の対話」といった言葉は自分にとってとくに意味をもたない 24) 出稼ぎ農民のおかれているひどい労働条件は、自分たちの生活とは関係ない 25) スーパーなどのビニール袋をぶらさげて歩くのはみっともない 26) 食物はおいしければ栄養や添加物など気にせずに食べればよい	個人生活志向
2	理念 理念 理念 理念	27) 社会をよくする運動などは好きな人がやることだと思う 28) 社会や国家について理想というものはとくにもたない 29) たまたま魅力的な考え方出会いても、それをさらに突っこんだりしない 30) 面白くないものに無理をしてまで勉強する人の気がしれない	無思想
3	自己 自己 自己	15) 部活などでは何かをするというより、そこにおいて雰囲気を楽しむことが好きだ 16) カッコよい自分であることがいまの私にとってかなり重要だ 18) 人目をひく行動や服装をするのは、少なくとも自分にとって意義あることだ	ナルシズム

表11 因子分析後の各因子の命名：俗性

因子	初期 カテゴリー	項目	命名
1	自己 他者 理念	34) 自分と意見の合わない人とつきあう必要はない 38) 自分より勉強のできない人とはあまりつきあわない 48) 貧しい人、苦しんでいる人など社会の片隅にいる人たちのことを、これまで真剣に考えたことはない	他者切捨て
2	他者 他者 他者	35) いざこざのおこったときは黙っているのがいちばんいい 36) 人のことを気にしていたのでは自分が損をしてしまう 37) 最初から負けるような勝負や交渉はやりたくない	功利
3	自己 自己 自己	31) 苦労して困難なことをするより、明らかにできそうなことをしたほうがいい 32) 自分がどういう人間かなんてことは、悩んでみてもはじまらない 33) 親の期待を裏切ってまで自分を生かしたいとは思わない	イージー <sup>イージー</sup> ゴーリング <sup>ゴーリング</sup>
4	自然 自然	40) 新聞などが、問題のある食物の加工過程を知らさせてくれるのは自分にとって役に立つ 42) 医者がくれるからといって薬をたくさん飲むのは、自然の摂理に反する	自然への無関心
5	理念 理念	46) 大学での勉強は、目的というより手段だと思う 47) 学問的な知識を身につけることがとくに魅力的だとは感じない	非アカデミズム
6	他者 自然 自然	39) 人一倍努力した者が出世するのは当然だ。(逆配点処理) 41) 日本は平地が狭いから山林をつぶして住宅をつくればよい 43) 年寄りは、手がかかるてやっかいな存在だ	現世肯定主義

をせず、他者とは波風を立てない生き方を示している。第4因子は食物の加工過程や薬物の副作用には無頓着というように、人工物の反自然性への認識が希薄なことを示しているため、「自然への無関心」と命名される。第5因子は学問を目的よりも手段とすることを示しており、「非アカデミズム」と命名される。第6因子はうまくやる者が出世するのが当然と考え、自然や弱者への顧慮の不在を示しており、功利と似た要素をもつが、むしろその根底にある思想と解釈し、「現世肯定主義」と命名した。

#### (4) 尺度の信頼性

各カテゴリーごとの尺度の信頼性をクロンバッックの $\alpha$ 係数から検討すると、各カテゴリーの $\alpha$ 係数は0.60以上であり(聖性=0.61, 遊性=0.80, 俗性=0.70), 尺度の内的妥当性は低くないことが示されている。

## V 結 語

医療系学生の価値信条体系の特性を検討した結果、以下の示唆が得られた。

(1)医療系学生は全体として、遊性、俗性に比べて聖性の傾向が強く、その価値信条が理想主義に傾き、現代青年文化のもつもう1つの特性である遊性は相対的に低い傾向にあることが判明した。

(2)専攻課程間の比較では、医学部学生に「遊」的傾向、歯学部学生に「俗」的傾向が有意に大きい。後者についてはおそらくその年齢が関係している。看護系学生は、遊性において医学部より低く、俗性において歯学部より低いが、特に一貫した特性はない。

今後の課題は、以下の3点である。

(1)質問紙の検討結果に基づいて、因子ごとに命名したもののうち、聖性の第1因子と第3因子、および俗性の第1因子の中に複数（3種類以上）のサブカテゴリー項目が含まれており、因子の説明が困難であった。そのため、これらの3つの聖性、遊性、俗性の因子の中の項目内容を再検討する必要がある。

(2)因子ごとに項目数が異なるため、本質問紙を1つのスケールとする場合には、因子間の項目数のバランス調整を行う必要がある。

(3)対象者数を増やし、質問紙の信頼性、妥当性をさらに検討する必要がある。また、医療学生の特徴を明確にするために、一般学生や他の年齢層との比較を行う必要もある。

## 資料1-1

価値構造質問紙				
	まったく そのと おり	やや そのと おり	やや ちがう	まったく ちがう
1) 教室でもどこでもはっきり自分の意見のいえる人がうらやましい。	3	2	1	0
2) 自分はみんなと違う考えでいると思ったときには、たいてい自分の意見をいう。	3	2	1	0
3) 人は自分の目的のためにほしいもの、やりたいことがまんすべきだ。	3	2	1	0
4) 自分のできないこと、苦手なことにはなるべくチャレンジしている。	3	2	1	0
5) 弱いもののいじめを見るととても腹がたつ。	3	2	1	0
6) 会合などでいつも世話役を買って出る人はえらいとおもう。	3	2	1	0
7) 自分には、誰かほかの人に話して聞かせたくなるような愛すべき友だちがいる。	3	2	1	0
8) 古い建物がどんどん壊されていくのは、見るにしのびない。	3	2	1	0
9) 洋服など自分が好きなものはだいじにしてだめになるまで使う。	3	2	1	0
10) 人が汗をかいて労働しなくてもすむことは幸福なことだ。	3	2	1	0
11) 生きものを育てることはふつうの仕事とちがって気持ちを豊かにする。	3	2	1	0
12) 自分の人生を意味づけてくれるような言葉や思想をいつも探している。	3	2	1	0
13) いま私はある理想に燃えていて心が充実している。	3	2	1	0
14) 周囲の誰もが反対しても、自分が真理だと思う道を進むつもりだ。	3	2	1	0
15) 部活などでは何かをするというより、そこにいて雰囲気を楽しむことが好きだ。	3	2	1	0
16) カッコよい自分であることがいまの私にとってかなり重要だ。	3	2	1	0
17) 自分で一生懸命辞書をひいて読んだものを他の学生に聞かせるのは損だ。	3	2	1	0
18) 人目をひく行動や服装をするのは、少なくとも自分にとって意義あることだ。	3	2	1	0
19) 人のために役立つような働きをめざそうとは思わない。	3	2	1	0
20) 日々の仕事や労働が人生でそれほど重要なことは思えない。	3	2	1	0
21) 早起きしたり、時間を守ったりといふ日常生活の秩序をあまり重く見ていない。	3	2	1	0
22) 悩んでいる人間は勝手に悩ませておけばいいと思う。	3	2	1	0
23) 「人間と自然の対話」といった言葉は自分にとってとくに意味をもたない。	3	2	1	0
24) 出稼ぎ農民のおかれているひどい労働条件は、自分たちの生活とは関係ない。	3	2	1	0

資料1－2

		まったく そのとおり	ややそ のどおり	やや ちがう	まったく ちがう
25)	スーパーなどのビニール袋をぶらさげて歩くのはみっともない。	3	2	1	0
26)	食物はおいしければ栄養や添加物など気にせずに食べればよい。	3	2	1	0
27)	社会をよくする運動などは好きな人がやることだと思う。	3	2	1	0
28)	社会や国家について理想というものはとくにもたない。	3	2	1	0
29)	たまたま魅力的な考え方に出会っても、それをさらに突っこんだりしない。	3	2	1	0
30)	面白くないものに無理をしてまで勉強する人の気がしれない。	3	2	1	0
31)	苦労して困難なことをするより、明らかにできそうなことをしたほうがいい。	3	2	1	0
32)	自分がどういう人間かなんてことは、悩んでみてもはじまらない。	3	2	1	0
33)	親の期待を裏切ってまで自分を生かしたいとは思わない。	3	2	1	0
34)	自分と意見の合わない人とつきあう必要はない。	3	2	1	0
35)	いざこざのおこったときは黙っているのがいちばんいい。	3	2	1	0
36)	人のことを気にしていたのでは自分が損をしてしまう。	3	2	1	0
37)	最初から負けるような勝負や交渉はやりたくない。	3	2	1	0
38)	自分より勉強のできない人とはあまりつきあわない。	3	2	1	0
39)	人一倍努力した者が出世するのは当然だ。	3	2	1	0
40)	新聞などが、問題のある食物の加工過程を知らせてくれるのは自分にとって役に立つ。	3	2	1	0
41)	日本は平地が狭いから山林をつぶして住宅をつくればよい。	3	2	1	0
42)	医者がくれるからといって薬をたくさん飲むのは、自然の摂理に反する。	3	2	1	0
43)	年寄りは、手がかかるてやっかいな存在だ。	3	2	1	0
44)	何も得することはないのにハメをはずして馬鹿騒ぎをする連中を軽蔑している。	3	2	1	0
45)	悪いことは悪いのだから、犯罪者の生い立ちなどから彼を弁護するのは意味がない。	3	2	1	0
46)	大学での勉強は、目的というより手段だと思う。	3	2	1	0
47)	学問的な知識を身につけることがとくに魅力的だとは感じない。	3	2	1	0
48)	貧しい人、苦しんでいる人など社会の片隅にいる人たちのことを見、これまで真剣に考えたことはない。	3	2	1	0

## 引用文献

- 1) 桂広介編著：青年期・意識と行動・青年心理学論集，第4版，金子書房，1987，p. 103-112.
- 2) 松原治郎：日本青年の意識構造，弘文堂，1983，p. 112-115.
- 3) 津留弘編：青年心理学，有斐閣双書，1985.
- 4) 見田宗介：現代青年像，講談社現代新書，1977.
- 5) 宮川知彰：学生の「不適応」について，現代のエスプリ，168，1974，p. 176-187.
- 6) 村瀬孝雄：青年期の人格形成の理論的問題——アメリカ青年心理学の一動向，教育心理学研究，20（4）：44-51，1972.
- 7) 見田宗介：価値意識の理論，弘文堂，1987，p. 12-157.
- 8) L. V. ゴードン，菊池章夫：価値の比較社会心理学，川島書店，1975，p. 59-76.
- 9) 久世敏雄編：変貌する社会と青年の心理，福村出版，1990，p. 43-44.
- 10) ケニス・ケニストン，高田昭彦他訳：青年の異議申し立て，東京創元社，1987，p. 20-96.
- 11) R. M. トーマス，小川捷之他訳：ラーニングガイド児童発達の理論，新曜社，1985，p. 355.
- 12) 下山晴彦：大学教育と学生相談，教育と医学，5：84-91，1991.
- 13) 和田全弘：親父の「背中」は断絶の壁，TASC monthly（財団法人タバコ総合研究センター），No. 185：35-25，1991.
- 14) 吉田昇他編：現代青年の意識と行動，日本放送出版協会，1982，p. 190-204.
- 15) 井上俊：遊びの社会学，第9版，世界思想社，1988，p. 156-180.
- 16) 井上俊：青年文化と生活意識，現代のエスプリ，86，1974，p. 108-125.
- 17) 日野原重明：新しい時代の医師と患者，メディカル・ヒューマニティ，5（2）：10-15，1990.
- 18) 藤崎和彦：アメリカにおける患者の権利について〔パート1〕患者からみたバイオエシックス，医療生協運動，10：38-42，1990.
- 19) 中川米造：サービスとしての医療——医療のパラダイム転換，農村漁村文化協会，1987，p. 23.
- 20) 星野一正：日本における医学教育とバイオエシックス，メディカル・ヒューマニティ，3（2）：40-46，1988.
- 21) 園田恭一編：社会学と医療，弘文堂，1991，p. 139-168.
- 22) 矢野栄二：医療職養成課程の学生の医療の社会性に対する態度，日衛誌，

- 43 (1) : 275, 1988.
- 23) 藤崎和彦：医学部新入生の行動科学的分析，日本保健医療行動科学会年報，4：237-255，1989。
- 24) Frederic W. Hafferty : Cadaver stories and the emotional socialization of medical student, Journal of Health and Social Behavior, Vol. 29, p. 344-356, 1988.
- 25) 吉永喜久恵，他：看護学生の自我同一性と実習適応感，神戸市立看護短期大学紀要，8：67-77，1989。
- 26) 小澤道子：看護婦の教育と就労—職業意識による自己成長の概念—，東京都立医療技術短期大学紀要，2：135-139，1989。
- 27) Haward S. Becker, Blanche Geer : The Fate of Idealism in Medical School, American Sociological Review, 23 : 50-56, 1988.
- 28) Renee R. Anspach : Notes on the sociology of medical discourse : The language of case presentation, Journal of Health and Social Behavior, 29 : 357-375, 1988.
-